

浄土

1986-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和六十一年二月二十五日印刷 昭和六十一年三月一日発行

第五十二卷

三月号





三月の秀句

三月や廊の花ふむ薄草履

飯田 蛇笏

仲春や庭の撩乱古机

松根 東洋城

手に持ちて線香売りぬ彼岸道

高浜 虚子



仏の心とは大慈悲これなり。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

春季彼岸会を迎えて……………原 口 正 弘……(2)

中国古寺の旅……………江 目 達 雄……(7)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑧

本願の念仏を唱える……………村 瀬 秀 雄……(14)

み仏とともに =12=

——軍隊生活——……………安 居 香 山 ……(20)

《読者のページ》

随想あれこれ……………横 島 広 一……(25)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(7)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第21回

神聖病後遺・

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「なずな」 松浦春子 画

春季彼岸会を迎えて



春彼岸、すがすがしい朝に境内を散歩すると何処からともなくただよう香りにふと足が向く。沈丁花である。庭先や生垣き、はたまたアパート下の陽の当たらない日陰にも、その放つ強い香りはまことに印象的である。今年もまたお彼岸の季節を迎えた。

亡くなった人をどんなに恋い慕ってみても、そ

の人が生きかえってくることはありません。しかし亡くなった人を追慕するとき、その人は私達に多くのことを語りかけてくれる。元京都大学総長平沢興先生が、当時大学二回生の息子さんを山で亡くし、そのときの追悼文の一節にこう述べておられます。

死ぬことは決して遠く離れ去ることではない。死がこんなに人間を近づけてくれるとは。二

原 はら
口 ぐち
正 しょう
弘 こう

十年に近いお前の生涯の中で、いつ、これほど近く、ふかく、そして静かに、こころのすべてで二人で語り合ったであらうか……。

人は、人に思われることによって、生きることの真のよろこびを知るのではあるまいか。亡くなった者もまた同じ気持でありましょう。ご先祖への墓参りは、それを機縁として、私達とご先祖さまとのつながりを一層深めてくれるのです。きつと私達に何か語りかけてくれるはずです。思いは人を養い、追慕するそのこころの中にその人はいつまでも生きつづけることでしょう。

經典に四食じじきということが説かれています。四食とは段食、触食そく、思食、識食の四つであります。はじめの段食とは、切りきざんだ食べもので、普段私達が食べものと呼んでいるものです。次の触食とは、外界との接触、すなわち五官をもってする感覚といってよいでしょう。生命を維持していく上での大事な感覚です。第三に、思食というこ

とばが出てきます。これは、人を支えていくもので、思う食べものという文字を書きます。思いを馳せるとき、それがそのまま食べものにつながる訳です。最後に識食じきというのがありますが、これは非常に高い心の世界をさして云います。これらの四食とは別に、立派な心の生育をうながす心の食べものの一つに、法喜食じきというのがあります。これは釈尊のお説きになった教え(法)をよく聞いて、自分の生活をその教えにかなったものにしていくことを喜ぶことであります。

太陽が真西に沈む春分の日を中心に、前後合わせて七日間いとなむのが春季彼岸法会です。その頃の夕映えの美しさは西方極楽浄土をおもわせ、そこから弥陀の仏国土への観想が生じ、この世の迷いの此岸から悟りの彼岸へ渡らんと願う気持がつります。大乘仏教の実踐徳目である六波羅蜜は、正にときをえてそこに説かれます。つまり、生活をしていく上で最も快適なこの好季に、仏道修行の功德は廣大とされているのであります。古

人は、

月も日も西へ西へといりあいの

かねぞ知らせる極樂の道

と詠んでいます。とくに我が国では西に展開する落日の光景が人々をして感傷的にさせ、いつかは訪れる死を速想させ、願わくば生まれたいとする極樂への往生が念じられると共に、一般には、故人の追福のためにこのお彼岸は身近かなものになっています。亡き人を偲ぶとき、亡き人の靈みたまにつながら自分自身の生命の尊さを感じることが出来るでしょう。『随願經』に、「敬いの心でもって香華や灯明、飲食などを仏に供え、お経を唱えれば、その福の七分の一は故人に、あとの七分の六はそれを修した施主が得る」と説きます。供養はこの香華等の供養のほか「善き行為を積む」という意味がありますが、ご先祖さまへの供養と同時に己れ自身の供養も忘れてはなりません。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、般若の六波羅蜜は

この善き行為の代名詞といえましょう。その六波羅蜜も要約すれば、戒、定、慧の三学となります。六度も三学も一念の念仏の中にそのまま具足円満され、衆生妄念の雲はたちどころに遠のいていくことでしょう。

ところで私事ですが、この原稿を書いている最中、尿管結石という激痛に見舞われましたが。かがんでも横になってもこの痛みは和らぎません。「運が悪いというより仕方ありませんなあ」と医者には云われる。結石が尿から自然に排出される迄、私自身この痛みと一体化しなければなりません。痛みが続く中、結石の動きを推量する。腰から下方へと痛みは移る。それがわかるのがせめてもの救いである。時間の移りゆくこと、この世のすべてが移り変わっていくこと、常住ならざるものは何ひとつないことを仏教では無常という言葉で表現しています。ともすればものごとがすべて変わっていくこと（無常）を、悲しいこと、つらいこと、苦しいことに直結して考えがちであるが、たとえば厳しい冬の寒さから解き放たれて大地に

草木の芽が萌え出ようとする春が巡ってくるのも、又芽ぶいた花や木が美しい花をほころばせることも、幼な子が成長することも、病気が回復し健康体に戻ることも、つまりは無常のあらわれなのです。その無常をどう感じ取るかはその人それぞれのところの問題であります。

私達の生涯にはその時々に一瞬の感動といったものがあります。またそのときそこでの一念に大きな意味を持つことがあります。「一輪の花の美しさ」「あの場面でのあの一言」「心を込めた願い」「感謝の念」等々。しかし、「念」にはまたもうひとつの意味、「忘れない」という意味も含んでいます。ご先祖さまのご恩を忘れない、亡くなった人と自分との縁をいつまでも忘れない、という意味もあるのです。

ふり向けばご恩を受けし人ばかり

ふと立ち止まり、ふり返ってみたとき、自分自身これ迄にいろいろな人にお世話になり、ご恩をこ

うむったことに気付くはずです。その反対に独り行き、勝れた素質を持っているが故に残念ながら他人の世話が出来ない。しようとしれない。他人の世話になったと思わない人もいます。そのような自利行のみの人に対しては「独覚の捨悲障」という言葉があります。

このところ新聞に、「いじめ」「いじめを苦に自殺」などの記事が紙面に大きく取り上げられますが、そのたびに『法華経』の常不軽菩薩のことが頭に過ります。彼は会う人誰にでも手を合わせ、たとえ石や瓦を投げつけられ、棒や杖で叩かれても私は心からあなたを尊びますと云い続けたという。迫害した人を救いとして、自らも仏となったという常不軽菩薩。その精神に共鳴し、実際に実践されてきた人もいます。翻って今の世の中、いじめの側の相手を、心底憎めない、むしろ相手の気持を慮る果てに取るべき道が、生を引きかえに身を投じるとは誠にいたましい限りであります。

子供たちの心の中に常不輕菩薩の姿を見る思いはするが、究極の道が早世であつては決してならない。縁により生をうけた以上、共に生を支え合い、お互い傷つけ合うことなく、この生命いのちを生かしたものです。

人の生きざまに二つの面があるといわれています。その一つは、その人が今日迄、過去どのような道を歩んで来たか、ということであり、他の一つは、その人が将来に向けてどのような願いを抱いて生きているか、ということがあります。仏さまには衆生済度の覚悟といったものがあります。四弘誓願に代表される総願を土台として、釈迦の五百の大願、薬師の十二願、文殊の十八願、阿閼しやくの二十願、弥陀の四十八願などです。私達はそのなかで仏さまのお心になつた「行ぎやう」として何が出来るのでしょうか。自分の罪障すら自覚することは難しい。自分が可愛いが故に自分の都合でものごとを解釈してしまふ。如是我聞とはよく云つたもので、健康な耳さえあれば誰でも聞こえる言葉が、実はどこ迄正しく聞こえているか疑問であります。

尊い教えも、その人に聞く耳がなければ聞こえず訳でありましょう。行には厳しいものもあります。そこには崇高な気高さがあります。しかし質素な生活もまた行ぎやうといえるでしょう。正しい教えを正しく聞き、それを実践していく。春のお彼岸は、まさしくその種子を育てる季節であります。『雑阿含経』の経文には、

智慧はわが耕す鋤にして、信はわが蒔く種子である。身口意において悪業をのぞくは、わが田における草とりである。精進はわがひく牛にして、そは行ないて退くことなく、行ないて悲しむことなく、われを安らけき境地に運ぶ。

とあります。心の畑を耕やし、欲望の雑草を取り除いて菩提の種子たねをまく――、春のお彼岸は、そういう意味でも正しい信仰を植えつける好季であります。

中国古寺の旅

江目達雄

(山形市迎接寺住職)

北京・広済寺

一昨年の晩秋、山形教区訪中団に加わって、北京・太原、大同とその周辺の古寺をめぐる。十日ほどの日程、毎日秋晴れがつづいたが、吹く風はもう冷めたかった。

北京に着いた次の朝、中国仏教協会本部のある広済寺を訪ねた。

大きな街路樹の陰でちょっと目だたない南門をくぐる

と広い内庭である。そこに黄衣の僧が数人、一列に並んで私たちを迎えてくれる。住持の明哲法師のほかは若い僧たちで、うち四人は十七、八歳の修行僧、あと二年間この寺で修学するのだという。

住持の案内で、山門を通り、弥勒殿におまいりし、大雄殿に向う。庭前には大きな青銅の宝鼎が置かれている。

大雄殿では、堂内いっぱい多勢の在家の信者たちが、大きな木魚のリズムにあわせて、熱心にお経を唱え

ている。明哲法師の話では、毎月四回、こうした集りをもっているということであった。いまの中国のお寺で、こんな光景に接しようとは、思いもかけないことであった。数年前、広州や西安の寺をめぐるときは、お寺におまいりする人の姿は、ほとんど見かけることはなかったのである。

大雄殿の本尊は、釈迦牟尼仏を中心に、迦葉・弥勒の二仏が並んでいる。過現未三世の仏である。東と西の壁面には九個づつの龕があり、十八羅漢が安置されている。

寺誌によるとこの寺は金末期の開創で、当初は西劉村寺と云った。金から元にかけての戦火で、この寺は全く廃墟と化し、土中に埋れてしまった。明の成化年間にたまたま土の中から仏像や石柱などが見つかり、その旧跡に堂塔を再建し、皇帝から「弘慈広済」の額を賜わった。以来、広済寺と寺号を改めたと記されている。いまの堂塔は、その後、一九三一年の大火で焼失後、復興再建されたもので、解放後も改修で加えられているということである。

弥勒殿や大雄殿のほかに、円通殿、舍利閣などの堂塔

伽藍がつらなり、鐘楼や鼓楼を具え、亭々たる大樹が影を落している。貴重な仏像、経巻、文物も数多い。北京有数の大寺の貫録をしめしているのである。

その堂々たる堂塔伽藍にもまして、若い修行僧と、熱心に経を誦していた多勢の信者たちの面影が忘れがたい。

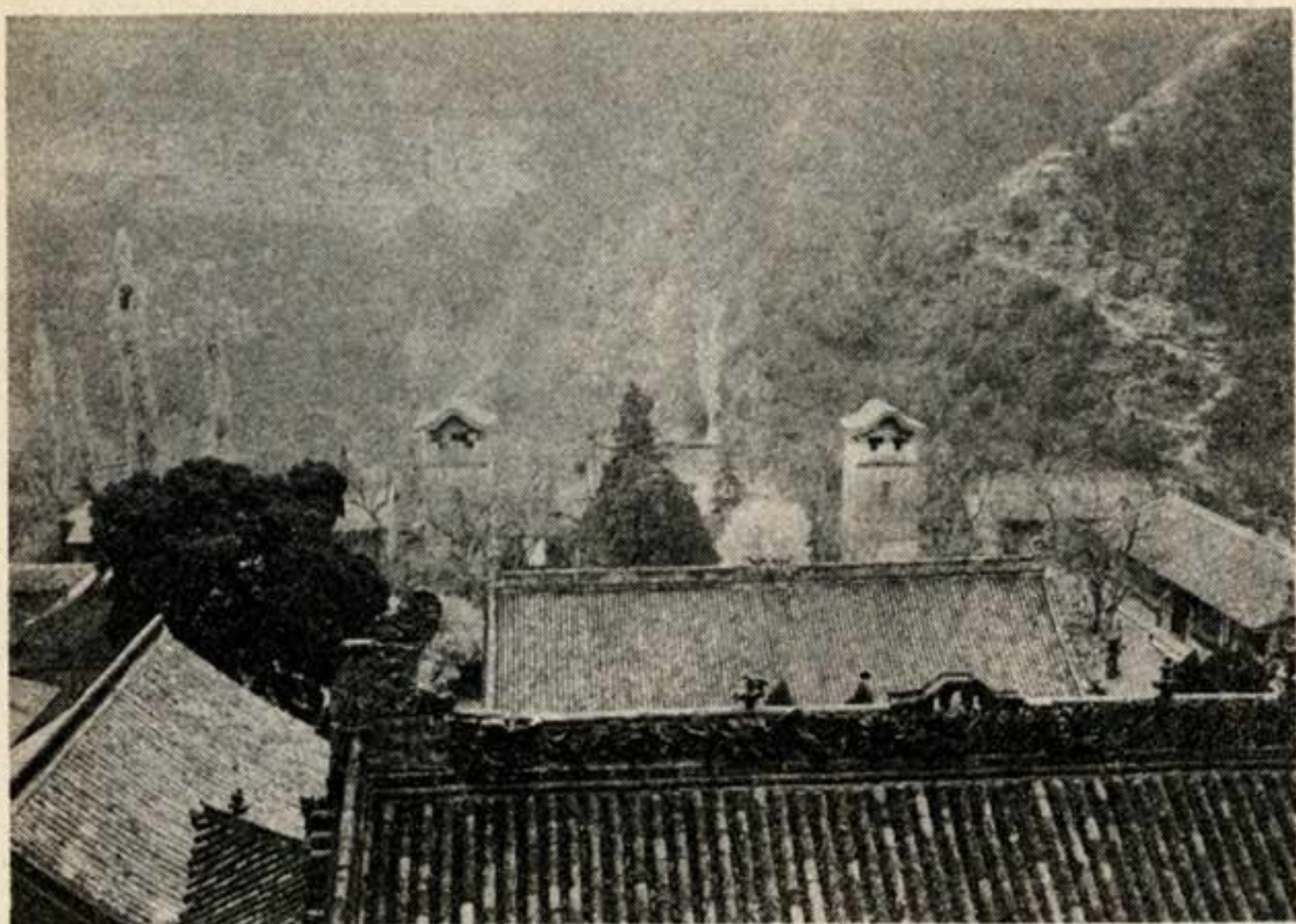
太原・玄中寺

中国民航機が太原に近づくにつれ、眼下の荒涼とした光景が、目にとびこんできた。茶褐色の大地だ。山の斜面は、山頂近くまで段々畑になっているから、春や夏は緑の山野に変わるのかもしれないが、晩秋のいまは荒涼とした茶褐色の地表だけであった。

予定よりかなり遅れて、太原空港に着く。

太原は、人口約二百万の、山西省の省都。標高一、四〇〇メートルの黄土高原に発達した都市である。年間雨量は四五〇ミリというから、東京のざっと三分の一にすぎない。

この日は、双塔寺という寺を訪ねる。正しくは永祚寺、八角十三層の優美な二基の塔が並ぶところから、双



——玄中寺の堂塔——

塔寺と称されている。山門を入ると、狭い内庭をかこみ、大雄殿、禅堂、客堂などがある。無住の禅寺である。内庭に真赤な花が咲いている。日が傾き、無住の寺の物さびしさが漂う。

次の日、マイクロバスで玄中寺に向う。こんどの旅のいちばんの目的地である。

太原の市内を抜けると、そう広くもない道路を、バスは黄塵をまきあげながら、猛スピードで走る。時速八〇から百キロ、日本ならたちまちスピード違反である。

太原から南に六〇キロほどで、交城県安定村につく。そこから右折して西に向い、文水に沿うて登る。舗装された道路である。右手の断崖上に白い塼塔が望まれて間もなく、駐車場に着く。バスを降り、文水にかけられた玄津橋を渡って、曲折した坂道をたどる。

文水の溪谷は樹木に覆われ、広葉樹は色づいている。兩岸は、岩壁が鋭く屹立して、その名のとおり石壁の砦をなしている。

ゆくてに「永寧禅寺」と書かれた、朱塗りの牌門が現われる。玄中寺は、唐代に竜山石壁永寧禅寺の寺号を、

賜わっているためである。

牌門をくぐり、ついで山門をくぐると、正面に四天王をまつる天王殿があり、左右に鐘楼と鼓楼が立っている。私たちは、右手の客殿に案内され、住持の明達法師に迎えられた。明達法師は中国茶をすすめながら、玄中寺が曇鸞、道綽、善導三祖の御遺跡であり、中国のみならず日本の浄土教の源流であること、荒廃のまま放置された玄中寺の堂塔が、中日友好に努力された日本の浄土教の方々のお力で、今日のように復興されたことなどを、静かな口調で語った。

ついで、明達法師の案内で、諸堂を巡拝した。本尊阿彌陀如来をまつる大雄宝殿、浄土三祖をまつる三祖堂、七体の印相を異にする阿彌陀如来像を安置する七仏殿、「西方聖境」の扁額をかかげ、数多の鉄仏をまつる千仏閣等の堂宇が、山腹の斜面に瑠璃瓦の屋根をつらねている。

大雄宝殿の庭前には、二基の唐代の古碑があり、この寺の古さを物語っている。唐の開元二十九年（七四一）建立の「鉄弥勒像頌碑」には、唐の太宗皇帝が文德皇后の病氣恢復を祈願のためこの寺を訪れ、道綽禪師に礼謁さ

れたことが記されている。

最も高所にある千仏閣の前に立つと、玄中寺の伽藍とそれを取りまく山々や谷を望むことができる。

古来、中国では仏道修行の霊地を、深山幽谷に求めた。山西省雁門に生れ、五台山の霊峰を仰ぎながら幼少年期を送られた曇鸞大師は、この石壁山の幽谷に靈氣を感得され、ここを浄土念仏の聖地と定められたのではなかったろうか。曇鸞・道綽・善導の祖師たちが、この玄中寺で浄土信仰を宣揚された北魏や隋唐のころは、石壁の砦は念仏の声にみちあふれていたことであろう。千仏閣の前に立つて、思いをめぐらしながら、玄中寺がいつまでも浄土教の祖山であり、浄土教徒の魂のふるさとであることを念じた。

懸空寺と応県木塔

大同に着いた次の朝、私たちは懸空寺と応県木塔に向かった。

懸空寺は、北岳恒山の金竜口の絶壁に建つ古刹。大同の南約七十キロの渾源県こんげんけんの郊外に位置している。

大同のまちを出ると、広漠とした茶褐色の大地。大同

も黄土高原の都市である。人口九六万、石炭(大同岩)の産地で、その石炭でおこす電力は遠く北京にも送電している。

黄土の平原を一時間余り走ると、山道にかかる。浸蝕によって鋭く抉られた峡谷が、一方に落ち込んでいる。稜線を越え南側の斜面に出ると、窯洞ヤウドウの部落であった。深く広い円型の峡谷をめぐって、無数の洞穴である。谷底は平坦になっていて、井戸らしいものや、山羊の群が



—— 応県の仏宮寺釈迦塔(応県大塔) ——

小さく見える。窯洞は、山の断崖に横穴を掘り住居としているもの、夏は涼しく冬は暖いといわれている。しかしこの自然と生活は、かなりきびしきものである。

渾源県のまちを素通りし、五キロほど走って、周りを岩壁にかこまれた谷間につく。風が強い。強風に吹かれながら谷に降る。対岸の絶壁に朱塗りの楼閣が、まさしく空中に懸るように建っている。懸空寺である。

「懸空寺」というしおりによると、この寺は北魏後期の創建で、その後いくたびか修復が行なわれた。楼閣は四十棟に及んでおり、岩壁に打込まれた木の梁で支えられているが、全体が一体となつてつながり合っているため、充分な安定を保つ。力学を巧みに利用した建築構造であると記している。

二棟の三層楼の建物が主殿となっていて、大雄殿、千手観音殿、地藏殿あるいは鐘楼、鼓楼など沢山の伽藍が絶壁に、びったりはりついているのである。

その空中に懸る楼閣を、浅道を伝わり、梯子を上下してめぐる。数えきれない仏堂があり、いろいろな仏たちがまつられている。釈迦如来を中尊に迦葉、阿難、菩薩の五尊像、交脚弥勒、千手観音、地藏尊、二仏並座、石

窟になっているところもある。そして大雄殿には道教の神像も並んでいる。

懸空寺のある北岳恒山は、天下五景の一つで古来道教の聖地。対岸に見える岩峰の奥には、数多の道観が建っているという。道教の神も、仏教の仏もいっしょに拝まれてきたのであろう。現世も、来世も、そして不老長寿もともに願う民衆の素朴な祈りが、そこにあった。

渾源县招待所で昼食をとり、暫くまちをぶらつく。露店が立って、野菜や果物、肉、香辛料などを並べている。さっきの昼食の食卓にも出た油で揚げたお菓子もある。人だかりをのぞくと大道将棋だ。映画館の前の人だかりは、一週間後に上映される映画の、看板を見る人たちである。昼さがりの渾源县のまちは、お祭りのようににぎわいであった。

再びバスで応県木塔に向う。北に約三〇キロ、黄土地帯である。白く塩が吹き出しているところもある。

応県木塔は、正しくは応県の仏宮寺釈迦塔といい、遼の清寧二年（一〇五六）の建立。八角形五層古櫓えんの木造の仏塔で、底の直径は三〇メートル、高さ六七メートル、中国で最古最大の木造建築とされている。

九百年の歳月を経た、急な階段を登る。各階ごとに仏像を安置し、最上層に釈迦牟尼如来像をまつる。像高一メートル、その周壁には六体の仏画が描かれ、頭上には飛天が描かれている。

遼の最盛期には大いに仏教が栄え、数多くの大寺が建立され、大蔵経も出版されたといわれている。応県の仏塔は、当時の盛んな仏教信仰を物語っているのである。

大同・雲崗石窟

大同の朝は冷え冷えとしていたが、一時間ほどバスにゆられ、雲崗石窟に着く頃はもう晩秋の日ざしが暖かかった。その日は日曜日のせいか大変な人出で、人民軍の制服姿が目立った。

雲崗石窟は、大同から西に二十五キロ、武周川北岸一キロに亘る一大石窟群、大中窟は五十三洞、石像の数は五下一千余といわれている。

雲崗石窟は、北魏の和平元年（四六〇）に僧曇曜どんようが文成帝に奉請して開窟がはじまり、太和十八年（四九四）に孝文帝が都を洛陽に遷すまでの三十五年間、大規模な造営がつづけられた。その後も一般の篤信者によって、北魏後

期の延昌五年（五一六）ごろまで、小窟小龕がうがたれたと見られている。曇曜によって開かれた最初の五窟（第十



——大同・雲崗石窟、第十二窟大仏——

六二十洞）は、曇曜五窟と呼ばれており、いずれも十六—七メートルの量感あふれる巨大な大仏が、窟内を圧している。曇曜は、三祖太武帝の廃仏後、仏教復興を詔勅した文成帝から、復仏の指導者、沙門統に任ぜられた北涼の高僧。その偉

風堂々とした大仏には、彼の仏教復興にかける悲願と気迫が、みなぎっているかのようなのである。

その後に関ついで造営された石窟は、コリント式列柱群を配するもの（第九・十洞）、前面に木造四層楼を架しているもの（第五・六洞）、右繞礼拝することのできる塔廟窟など、多様な様式が見られる。

石窟の壁面や天井は、いずれも大小無数の仏・菩薩・羅漢・飛天などの浮彫りで埋められている。ヒンズー教のシヴァ神やヴィシュヌ神、あるいは獅子、鹿、鳩のような動物も彫刻されている。本生譚や仏伝の物語も描かれている。そんな中に、法隆寺の釈迦三尊にそっくりの仏の姿を見出し、シルクロードの息吹きを感じた。

この雲崗石窟の仏教美術は、インド、ガンダーラ、中央アジアの多様な様式の影響をうけながら、これに中国伝統の様式も加え、新興国家北魏のみずみずしい気風を表出しているといわれている。

私は、石窟から石窟へとめぐりながら、僅か三十五年の間に、この壮大な石窟群を造営した北魏の、若々しい創造力と旺盛なエネルギーに驚嘆するとともに、雲崗石窟のために用意された時間の、余りにも少ないのを悔んだ。

本願の念仏を唱える

村瀬 秀雄



「諸行の中に念仏を用るは、かの仏の本願なる故なり」

釈尊は仏道修行に様々な方法が数多くあつて、どの修行もそれぞれに勝れた功德があることを説き給うた。その中で釈尊は阿弥陀仏が一切の人々を極楽浄土に往生させるために、数多くある往生の行の中から特に念仏を唱える行を選択して、念仏往生の本願を成就し給

うてゐることを明かした。その本願というのは「どのような人でも真心をもって念仏を唱え、極楽往生したいと願えば必ず往生させる」と誓ひ給うたことである。どのような人でもというのは、善人でも悪人でも関係ないのであり、罪の軽い重いを問うことなく、すべての人々ということである。凡そ極楽往生したいと願うならば、阿弥陀仏が選択してたと給うた本願に適うように、念仏を唱えてい

なくてはならない。いかに勝れた修行であっても本願にない修行は往生に関係のない行なのである。

善導大師は仏道修行を分けて二つとし、一には正行、二には雑行であるとした。正行は極楽往生できる修行であって、浄土三部經に説かれている修行である。雑行は正行以外のすべての修行である。正行の中でも必ず極楽往生できる行は、専ら念仏を唱える行であるから、これを正定の業と名づけた。大師は次のように説いている。

「一心に専ら南無阿彌陀仏と唱え、行住坐臥の何れの場合でも時の長短に関係なく、常に念仏を相續して唱えていれば、その者は必ず極楽浄土に往生することができ。このように念仏を相續することを正定の業という。何故なら念仏は阿彌陀仏の本願に通った行であるからである」(觀經散義)

そして大師は、念仏を唱えている者は誰でも往生できるが、雑行を修めても往生できな

いとして、次のように説いている。

「信仰も修行も人によってそれぞれ違い、念仏を唱える者もいるし、雑行を修めている者もいる。その中であって専ら念仏を唱えている者は十人が十人ながらすべて往生することができ。ところが雑行を修めている者をみると、真実心を欠いて修行に耐えられない者が多く、千人が千人ながら一人も往生することができない」(往生礼讃偈)

続いて、雑行を修めても往生できない理由として、さらに大師は次のような損失をあげている。

「一つには、雑行は煩惱や悪事によって妨げられ、心が乱れて純一に修行することができない。二つには、雑行は阿彌陀仏の本願に係のない行である。三つには、雑行は継続して阿彌陀仏と極楽浄土に思いをかけない行である。四つには、雑行は自力を恃んで修行するために反省心がなく、罪の意識が薄いために慚愧の心が起らない。五つには、念仏が報

仏恩の行であるのに、雑行は仏恩を報ずる心がない。六つには、雑行は凡夫という反省心がないために慢心を生じ、他人を軽んじ易い。七つには、雑行は戒定慧を究めるために自力の我が強く、同輩と親しまなくなる。(以下略)(同上)

そして大師は次のように説いている。

「極楽浄土に往生したいと願うならば、願わくはよくよく自ら考慮し、正行と雑行との得失を知り、己れの素質と環境を勘案して欲しいものである。生れ難い人間界に生を受けていることを思い、今生を終ってから、極楽浄土に往生したいと願うならば、行往坐臥において自らの心を励まし、己れに打ち勝って怠けることなく、昼となく夜となく念仏を相續し、生涯を通じて念仏を唱えねばならない」

(同上)

釈尊が明かし給うた往生の行は念仏ばかりではなかった。まず初めに阿弥陀仏や極楽浄土の莊嚴に思いをこらして観想する行が勝れ

た往生の行であることを説き、それに続いて念仏の行を明かし給うた。それというのも凡夫にとって観想の修行が難かしいからであって、釈尊は凡夫を憐れむ慈悲から、観想に続いて念仏の法門を明かし給うたのである。大師は次のように説いている。

「観想に努めることは修行を積んだ者でも容易に修められない行である。これに対して念仏は誰にでも直ちに修められる行である。多くの人々は外界の事物や現象を意識するにつれて善悪の判断と好き嫌いの感情を生じ、これによって愛着を起したり嫌悪する等の煩悩のもとをつくる。煩悩が盛んになると、それにつれて心情が散乱し、思慮分別を欠いて平静を保ち得ないことになる。このような状態にあっては精神統一に努めたり、煩悩をなくして修行する観想は難しくてできないことであらう。そこで釈尊は人々が暮している実際の姿をみて、観想の修行ができないことを憐れみ給うた。釈尊はこのような人々をこそま

ず急いで救わねばならぬという思召から、誰でも修行できるように、専ら念仏を唱える法門を明かし給うた。念仏はまさしく修め易い行であるからこそ、智者であつても愚者であつても、善人であつても悪人であつても同じように修められる。その者の素質や環境に係なく、いつどのような場合でも、その者の浄不浄を問うことなく、念仏を相續して唱えている者ならば必ず極楽浄土に往生することができるのである」(同上)

もし阿弥陀仏が念仏以外の諸行をもつて往生の行とする本願をたて給うていたなら、往生できる者は極めて少なく、往生できない者が甚だ多かつたに相異なる。法然上人は次のように説いている。

「もし阿弥陀仏が念仏以外の諸行をもつて往生の行とする本願をたて給うていたなら、往生できない者の数は甚だ多かつたであらう。

阿弥陀仏は法蔵菩薩として修行し給うていた時に、慈悲を人々に平等に与えたいという心

から、すべての人々を往生させたいという聖意をもち、造像起塔その他の諸行をもつて往生の行とせず、ただ念仏を唱えるという一行だけで必ず往生させるという本願をたて給うたのである」(選択集)

このような阿弥陀仏の慈悲を思うにつけても、念仏を唱えなくてはならない。上人は次のように勧めている。

「もし西方極楽浄土に往生したいと願う者であれば、すべからず雑行を捨てて念仏を唱えなくてはならない」(同上)

その内という心の油断があつてはならない。明日とはいわずに念仏を励んで唱えなくてはならない。上人は次のようにいった。

「たとえ七十八十の寿命があるからといって、思えば夢のように過ぎてしまうものである。まして老少不定といって、若いから大丈夫であるというわけにゆかず、いつどのようなにして最後を迎えないとも限らない。決して後日を期する心があつてはならない。その日

その日に思いをこめて念仏を唱えていなくてはならない」(十二個条問答)

武蔵の国(東京都)の御家人津戸の三郎為守は、十八歳の治承四年(一一八〇)に源頼朝の挙兵に馳せ参じ、それ以来各所の合戦に武勇を現わした関東武士である。建久六年(一一九五)に東大寺の落慶供養が営まれたが、為守は頼朝の一行に加って、三月四日に京に入った。為守は同じ月の二十一日に法然上人の庵室を訪ね、念仏往生の教えを授かった。為守は故郷に帰ってから怠ることなく念仏を唱えていた。するとある人がいうのに、熊谷の入道にしろ、津戸の三郎にしろ、何も知らない者であるから、法然上人は普通の仏道修行はとてできないことを知って、念仏の行を勧めたのであろう、と。そして、もし学問があれば必ずしも念仏にかぎらず、その他の修行も教えたに違いないということであった。為守はこの噂を聞いて、真偽を確かめるために上人の手紙を送った。上人は次のように認め

て返事した。

「熊谷の入道や津戸の三郎は何も知らない者であるから念仏だけで極楽往生できる教えを勧めたのであって、もし学問がある者ならば必ずしも念仏に限ることがなかったであろうという者がいるとのことである。しかしこれは全く大きな誤りである。何故なら念仏の行はもともと学問のあるなしに関係がないし、阿弥陀仏が誓い給うた念仏往生の本願はすべて広くすべての人々を往生せしめ給うことであった。学問のない者のために念仏往生の本願をたて、学問のある者には別に深遠な行を本願となし給うたということはない。本願に十方世界の人々という句があるが、その中には学問のある者もない者も、罪がある者もない者も、善人でも悪人でも、持戒の人でも破戒の人でも、賢人も愚人も、その他すべての人々が含まれている。これまで極楽往生できる教えを尋ねてくる人があれば、その人に学問があるのかないのかを問題にせずに、誰にでも

同じように念仏の行だけを説いてきたのである」(津戸三郎へつかはす御返事)

また上人は、仏の本願は慈悲の本願であるとして、次のように述べた。

「念仏往生の本願は阿弥陀仏が人々を区別しない平等の慈悲の上に立っておこし給うた誓願であるから、どのような人であつても差別し給うことがないのである。仏のみ心は慈悲を本体となし給うている。だから観無量寿經に、仏のみ心は人々を救わずにいられない大慈悲心であると説かれているわけである。善導大師はこの一句を、仏は人々を区別しない平等の慈悲心によって遍く一切の人々を救い給うと説いている。大師が一切の人々といっているのは広くすべての人々を含んでいて、洩れる者は一人もないということである」(同上)

また法然上人は別のところで、本願の念仏は声に出して念仏を唱えることであり、自分の耳に聞える程度の声がよいとして、次のよ

うにいった。

「念仏行為ならば手に数珠を持っただけで、仏はこれを見給うし、念仏を唱えようと思っただけで、仏は行者を念じ給うであろう。このように阿弥陀仏が見給い、念じ給うて下さる身となって欲しいものである。そうはいっても常に声に出して念仏を唱えていなくてはならない。それは行者の三業を仏のお働きと一致させるためである。三業とは身体で仏を礼拝し、口で念仏を唱え、心で仏を念ずることである。しかし仏の本願は念仏を唱えることであるから、声に出して念仏を唱えることが中心にならなくてはならない。同じ声を出すにしても、自分の耳に聞える程度の声で唱えれば、高声念仏のうちに入るのである」(或人のもとへつかはす御消息)

(つづく)

みにととも

=12=

—軍隊生活—



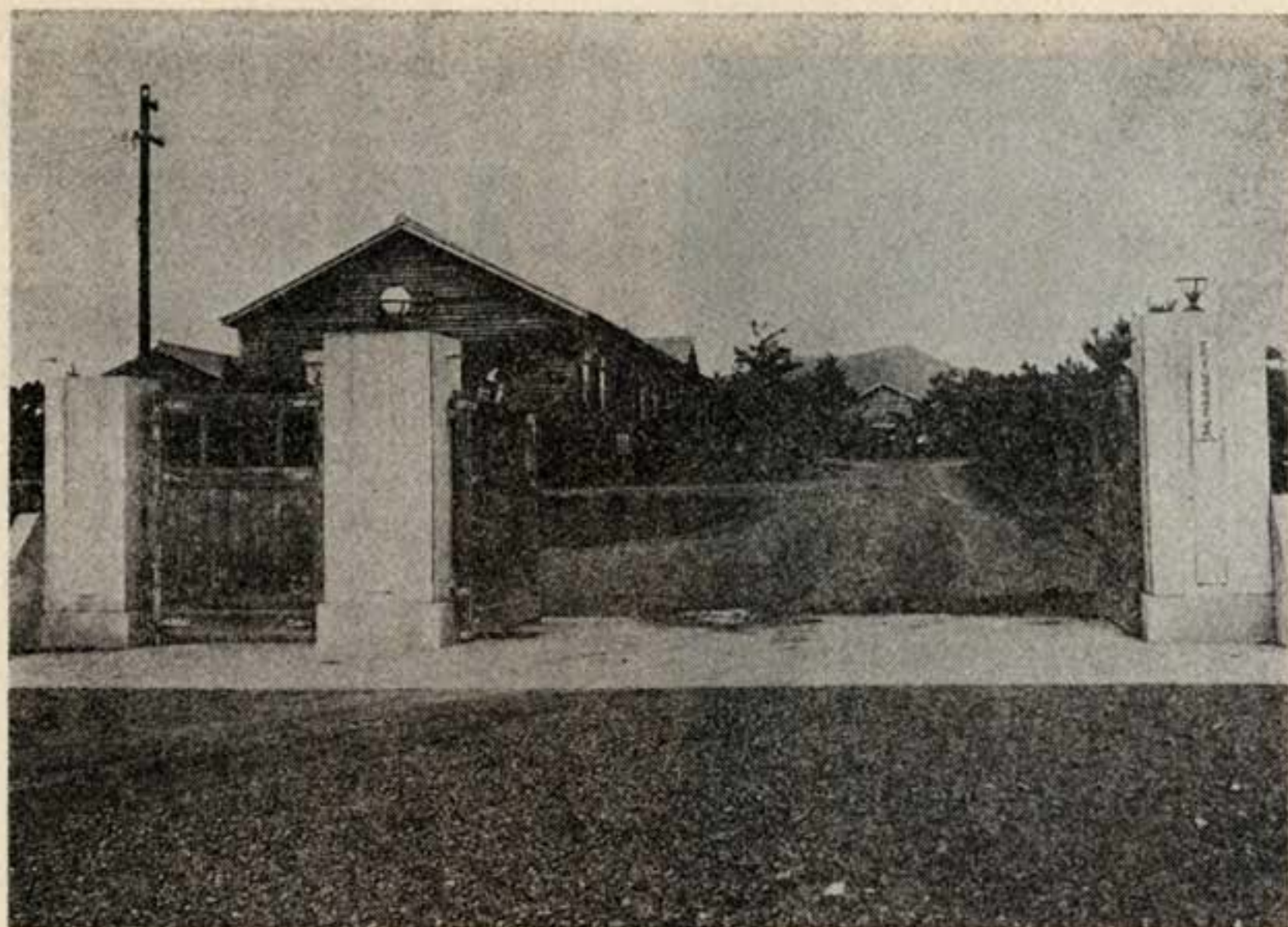
山 香 居 安
さん こう い やす

(大正大学教授・文博)

大東亜戦争の戦雲急をつげて、私は昭和十八年学徒出陣をして、軍隊生活に入った。それは、私の生涯における特殊な体験であったが、また人生における得難い体験でもあった。幸い外地にも行くことなく、昭和二十年の九月に、日本の敗戦と共に除隊することになる。そして、この中でも、多くのみ仏たちに教えられ、守られてその生活をやり通してきた。

私の生涯を通じて属している社会は、浄土宗という限られた社会であり、少し広まっても宗教界、学界という社会である。ところが、軍隊という社会は、雑多な社会の人が入りまじって、交り、争い、戦う社会であり、そこには、あらゆる階層や、社会の人との交流の場があった。そして、同じ釜の飯を食い、時には命をも共にかける社会だけに、その紐帯はまことに固い。

已に終戦後四十年も過ぎているというのに、そうした人びととの交りは、いまだに続いている。そして、人生も後半になった今、お互いにその紐帯をなつかしみ、数々の思い出の中で、助けあい、楽しみあうことを求めようとしている。そして、時には、人生のドラマさえも、それについてくる。



——豊橋第二予備士官学校——

○
私の本籍が滋賀県であったため、私は郷里の三ツ谷村から出征して、敦賀にある連隊に入った。勿論、星一つの二等兵からであり、厳しい兵隊生活を送った。幸い私は学徒兵ということで纏められていて、教官も学生出身であり、指導する古参兵も、比較的有識者が割りあてられていた。それだけに、よく語り伝えられているような無茶苦茶な軍隊生活ではなかった。

しかし、失敗をしたり、悪いことをした時など、大いに叱られ、ビンタを食ったことも、しばしばであった。その内に幹部候補生試験にも合格して、星の数もふえ、敦賀の生活は三カ月程で、豊橋陸軍第二予備士官学校に入校した。兵科は歩兵であった。

この予備士官学校は、まだできたばかりで、平屋建てではあったが瀟洒な兵舎が建ち並んでいた。敦賀の豚小屋のような生活から一転して、楽しい候補生生活が始まった。演習場は天白原という草原であり、ここで毎日の訓練に励んでいた。

しかし、ここの生活も永くはなかった。戦争が苛烈に

なり、米軍の反攻作戦も激しさを加えてきたため、のんびりと此処で将校訓練をしていられなくなり、成績のよい者と、身体の弱い者を残して、多くは満洲（今の中国、東北地区）或いは南方で、現地教育することになった。そして、私は少し成績がよかったためか残され、多分六月頃であったか、軍曹の位になったわれわれは、京都の福知山の教育隊に転校した。ここには、全国の予備士官学校からの残留組が集ったわけで、第十一期生ということになっている。そして、従来のわれわれがいた予備士官学校は、特甲幹の養成所になった。更に短期の将校養成



——予備士官学校時代の筆者——

校になったわけである。

福知山には、連隊があったのだそうであるが、その連隊が南方作戦で全滅したため、残された兵舎がそのまま教育隊となったもので、豊橋とは違って、また昔なりの古めかしい兵舎に入ったわけである。そしてここで、十二月の末の卒業まで、それこそ血のにじむような厳しい教育を受けて、見習士官という将校の卵になったのであった。

ここで私は、歩兵の第二中隊に入れられた。後で聞いたことであるが、黄色い屋根瓦の中隊には、鬼隊長がいるということ、恐れられていたという。その恐ろしい鬼隊長のいる中隊に、入ることになってしまったわけである。そういえば、私の中隊の兵舎だけが、どういうわけか屋根瓦の色が黄色味を帯びていた。他の兵舎のは、赤茶けていたのである。

その鬼隊長の名は谷武雄といい、当時中佐であった。そして、その中の第二区隊に属することになるのであるが、その区隊長が大橋正一という方であった。谷隊長はいかにも鬼隊長らしく、目はギョロリとし、顔には大きな刀の切り傷があった。なんでも満洲の戦地で、敵に切

りつけられた跡であるという。鬼隊長であるゆえんである。私達は、この隊長の前では、口もきけない程であった。

これに対して、大橋区隊長は物腰はやさしく、喋る口調も静かで、谷隊長とは対象的であった。勿論、軍人としての厳しさはあったが、学徒兵あがりの将校で、われわれの気持ちをよく理解していてくれた。そして、花を生けたり、尺八を吹いたりする風流人でもあった。

秋の月夜の晩に、夜間演習をしたことがあった。激しい訓練をした後、汗をふきながら休んでいる時、大橋区隊長は、

「ここで、尺八でも聞かせてやろう」

と、用意してきた尺八を吹いて、聞かせてくれた。かつて古武士が戦場に尺八を持って行き、戦陣で吹いたと聞いたことがあるが、区隊長の尺八も見事なもので、うっとりとして故郷の月などを思い浮べたことであつた。

この区隊長は、いまは清水と改名され、新潟県の亀田町で農業をしておられる。数年前、その地を訪れて、旧

情を温めてきたのであるが、まさに晴耕雨読で、相い変らず茶をたしなみ、尺八を吹き、心豊かな人生を楽しんでおられた。そして、家の廻りの畠に生えているしいたけや、野菜類で、清水氏手づくりの即席料理に舌鼓みを打って、昔話しに花を咲かせてきた。それは、全く得難いみ仏との再会であつた。

この福知山生活は、やがて夏が過ぎ冬に入り、寒い土地であつただけに、その訓練は血と涙のにじむものがあった。おまけに厳しい鬼隊長殿の指揮下ということもあって、仲々に苦しかった。しかし私は、お蔭で身体も強健であり、小僧生活で精神訓練もできていたせいか、よくこの苦しみに堪えて努力した。成績もまあまあのものであつたらしい。そして、いよいよ最後の卒業試験の時が近づいてきた。

或る日私は、鬼隊長の前に呼びだされた。

「安居候補生。よいか。卒業試験で一番になるように頑張れ。特別勉強時間を与えるから、消燈後も、特別室で勉強せよ」

まさに鬼隊長の命令である。「ハイッ」と絶対服従である。どんな成績になるかは予測の限りでないが、私は必死で勉強した。勉強といっても、軍人勅諭を暗記し、一字も間違えぬように、変体仮名で書くことであり、歩兵操典や、軍隊内務令、戦陣訓等を丸暗記することであった。私は日夜これに取り組んだ。

後で聞いたことであるが、当時、中隊長間では、誰の中隊から教育隊の一番がでるかが話題の焦点となっていたようで、各中隊長は、必死になって候補生にハッパをかけていたようであった。私もその馬の一人として、この競走にハッパをかけられていたわけである。そして私と言えば、めくら馬のように、叩かれるままに走り続けていたわけである。大橋区隊長は区隊長なりに、ハッパをかけたり、慰めたり、何くれとなく気をつかって頂いた。

こうした苦勞が稔って、ついに私は、教育隊で首席になるという栄冠を勝ち取ってしまった。恩賜賞を頂くという光榮を、得たのであった。このことは、しかし私自身がびっくりした。とても私の力では、できるとは思っていないなかつたからである。

後になって答辭を読む時になって分つたのであるが、全国から集ったすぐれた学徒兵が、千八十五名いたのである。官公私立各大学の学徒兵の中には、頭のすぐれた者も数多くいた。そんな中で、よくまあ首席になれたもの、まことに不思議でならない。これも鬼隊長や、大橋区隊長の特別な配慮と、叱咤があつたお蔭のことで、ほかに何物でもない。私の力など、とても及ぶものでなかつた。

ここにも、私を取り巻く多くの仏たちの力があつたのである。そして、私はこうした仏達の力に守られて、こうした光榮を勝ち得たのであった。軍隊という特殊な社会でのことであるため、今日のような社会になってみればこの光榮も馬鹿みたいなことであるが、当時にあつては、大変なことであつた。

そしてこの結果、周りの私を見る目が違つてきた。十二月末日、いよいよその卒業式が行われることになり、私は感激に胸を打ち震わせていた。

そしてそこでも一つのドラマが待ちうけていた。

(つづく)

△読者のページ▽

随想 あれこれ

横 島 広 一

○菩提寺をめぐるって

当菩提寺東谷山正専寺は、幕末から明治初年にいたる約二、三十年間、寺小屋として栄えたという。

ここ、茨城県北相馬郡大塚戸村は、明治二十二年隣村の菅生村と合併して、菅生村大字大塚戸となり、両者の中央に新校舎が新築されつつあった。ところが政治上の問題がこじれ改築され、大塚戸小学校が発足した。実に、明治三十二年四月のことだった。

ところが同三十五年の関東全円を襲った大暴風雨は、各地に未曾有の被害をもたらしたのみか、竣工間もない大塚戸小学校校舎をもむざんに倒壊させ、区民を慨きの底に落ちこませた。村会は急拠開会され、とりあえず正専寺を仮校舎と決定して、授業は四、五日後から開始されたときく。

この大塚戸小学校初代校長は、私の父広吉であり、同郡守谷小学校長から迎えられて、郷里に錦を飾った。

しかし父の感激もほんのつかの間、大正二年度より、義務教育六年と高等科（二年制、義務制ではない）を併置した菅生尋常高等小学校が発足、学区はもと通り全村一区に変わり、大塚戸小学校は同校大塚戸分校と改称された。高等科の免許状はもたず、だからといって遠隔の尋常小学校の転動もかなわぬ父は、涙をのんで分校主任訓導に降格せざるを得なかった。

広吉の長男だった私は、当時数え六歳、無類の腕白児だったと。

一歳年下の裏手の友を誘って近くの釈迦堂付属墓地の塔婆を全部引き抜き、周辺のどてに渡して登り下りして一本残らずブリブリ折ってしまった。案の定、夕食時に

堂敷代表からの抗議がうちに持ちこまれた。

翌日、うちの母に連れられた私と彼は、数軒の堂敷をあやまり歩かせられ、帰途折られたままの塔婆を全部たてさせられた——私はとうに忘れてしまったが、裏側の友がそう言っているから誤りはなからう。

その頃だったろうか。お茶摘みに追われている母が、「広は足手まといになるから、学校へ連れて行け」と姉に命じた。その夜のこと、姉は母の前で泣きじゃくりながら、こう語った。

「広は、学校へ行ってもちっともじっとしていない。授業中は机の下をもぐって歩いて、足を引っ張ったり、くすぐったりして……、遂に先生が本堂の外へ押し出して中へ入れないようしてくれた。あんなに恥ずかしい思いをしたのは始めてだ。二度と広を学校へ連れていくのは御免だ」と。

大正四年四月、私は小学校へ入学し、一、二年とも父の教鞭下、次いで三、四年と分校におり、五、六年は本校で学び、同十年四月県立水海道中学校に入学した。

小学校六年間の「この子を何んとか一人前にするには、普通の手段ではだめだ」との決意からきた勉強への

追いたては、今にして思うと愛の鞭そのものだった。

ただ、中学校の五カ年、それに引き続く茨城師範本科第二部の一カ年の計六カ年間、何一つ言わなかった。

それは、実に青年前期、後期にあるわが子の反抗、反動をおそれたからであらう。なによりその事実を物語っているものは、日本に初めて児童心理学の存在を持ちこんだ東洋大学教授高島平三郎著『児童心理講話』の本文中に、ところどころ註記してある父独特のガラスペン書きの文である。

この父は昭和八年、母のあとを追うように、突如メチルアルコールのたたりでこの世を去った。

それから数十年の歳月を経た或る日、念仏衆徒になった老妻は、正専寺先々代住職の未亡人から、実に意外なことをきき、私に涙もろともに伝えてくれた。

「広一先生が師範学校を卒業した二、三日後のこと、まだ元気だった先々代住職のもとで、『うちの広も漸く師範学校を卒業しましたよ。妻とともに、どんなにこの日を待ったことか』と男泣きに泣き、住職も私もつい貰い泣きをしたことがありましたよ……」と。

側におられてこの話を共にきいていた私の近くの小

学校同期の女性の方は、「広ちゃん（私に対する当時の呼び名）は、四年生の誰かがいたずらをする、広吉先生が出てこられ、『うちの広を呼んでこい』と命じ、そこへ何知らず来た広ちゃんは、『お前が悪いから、外の人がいたずらをするんだ』とビンタをくりかえしくりかえし……みていらなくなった外の先生が間に入られてその場はおさまったが。それから、『いたずらをする、広ちゃんに気の毒だから』と誰もおとなしくなったことが思い出されますヨ」と言い添えられたと。——始めて知る、秘められた亡き父母の悲願を思うことである。

○彼岸会——村人たちの宗教生活——

燃えるような夕日が残照を残しつつしずしずと西山に没する様は、まさに人の臨終を思わせる。それをみた昔の人々は、「ああ、あの向うに先祖はいますのだから。サア、この彼岸にこそ、先祖様を霊界よりお迎えして供養をしよう」と。そうした考え方に共鳴した人たち、或いは地域では、彼岸会の風習が中国よりこの日本に伝わり定着する以前より、各地で彼岸会、彼岸参りをやったといわれる。当地では、彼岸が来ると仏壇を清めて、朝

夕にお参りを絶やさぬ。特に新仏のある家では、お参りに来られる方を丁重にもてなしている。

また菩提寺では、朝百八を略して十八の梵鐘をならして後、日々の朝夕の行を勤める。檀家の念仏徒は、中日にこの本堂に集まり、彼岸念仏を行なう。

法眼ほうがんという先達が念仏太鼓をたたき、鉦を打つのに合わせて念仏行を終え、静かに酒席に着く。これがまた供養であり、また年よりたちの唯一の娯楽である。

さて、彼岸とは何を意味するものか。仏教の教えでいう彼岸とは、いわゆる極楽浄土、悟りの世界であり、釈迦のように悟った者以外到達し得ない理想の世界、これに対する此岸しがんは、これ、煩惱の世界である。その間の川なり海なりは、生死を喻えたもの。われわれ生れれば此岸に、死せばこの川海にもどる。ここに、彼岸の意味があるかと思う。

「暑さ寒さも彼岸まで」とか、彼岸が来る度に、「ああ、また彼岸か」と、何回くりかえしたことであろう。真赤に熟した柿の実が風もないのにズシリと音たてて落ちるように、生命もまた——そんなことが胸中を去来するこの頃である。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（八）

— 敦煌（嘉峪関） —



木下隆一

（随筆家）

何度か鉄路を横切ってバスは進む。道はそれ程カーブしているとは思えないのに、車窓の右の厚い雲に覆われた祁連山脈が、左の赤や緑のペンキをぶちまけたような岩肌を見せる馬鬃山の山並が、近づいたり遠ざかったりする。

左前方の地平線にボツンと建物が見えた。「嘉峪関です」とガイドの王さんが指さす。みるみる城壁を廻らした高樓が全容を現す。まるで蜃気楼を見る思いである。「蜘蛛巣城だ」と思わず口走ると、「何ですそれ」と、横にいたM君が聞き咎めた。「知らない？ 黒沢明の蜘蛛巣城って映画」「……」無理もない、M君と私とは親子ほど年が違う。その私が学生時代に見たのだから、M君が知らなくて当り前である。「シェークスピアのマクベスの翻案劇でね。それに出て来た城が日本離れしてたんだ。モデルはこれだったんだな」「じゃあ、シノブシス（あらすじ）もセットも、外国の借り物だった

ってわけですか。さすがあ、世界の黒沢！」

この城を中にして、南北に万里の長城が延びている。北の方はいくらか原型をとどめているが、南は殆ど崩れていて、土塊が点々と連らなっているだけである。一見変哲もない土塊のようだが、布隆吉のそれと全く異なっているのは、人の手が加わった日干し煉瓦の堆積が、風化して元の土に還ろうとしていることである。往時は馬鬃山から祁連山脈の麓まで達していたのかも知れない。その長城線を断ち切って、いまは甘新公路と上海とウルムチを結ぶ鐵路が走っている。道の傍に長城の名残の大きな土塊があったが、「登るな」という立札が立っていた。しかし誰も登りたくなるらしく、土塊にはありありと人の登った跡が刻まれていた。東の山海関から断続的に繋がって、異民族の侵入を阻止していた万里の長城は、漢の時代には敦煌の西、つまり玉門関陽関の線まで延びていたらしいが、砂に埋没してしまつて、明朝以後に築かれた長城はここに尽きている。言うなれば、嘉峪関は西の鎮めの城塞であつた。

道を左にとって、バスは嘉峪関へ向かう。二十メートル以上ある日干し煉瓦と土を突き固めた二重の城壁で守られたこの城は、明代の初期一三七二年に造られ、常時二、三百人の兵士が駐屯していたとか。外壁の城門を車体を擦らんばかりにして入って行くと、内壁の二層の楼門の前の広場に出た。左手に管理事務所と売店があつて、観光客が群がっている。我々は閉門間際に滑り込んだ恰好になつたが、この辺境の城塞を毎日かなりの人が見に来るようである。

ここからは徒歩で、内壁の楼門を潜る。重厚な造りである。すっかり塗が剥げてしまつて、ところどころに名残の朱色が見られるだけだが、築城当時は華麗で、侵入者を圧倒するに充分な偉容を誇っていたに違いない。内壁の内側に沿って、城の上に登る馬道と呼ばれる石畳の坂道が二本つけられている。「急な傾斜だが、乗馬のまま登れるように、階段にはなっていない。斥候に出ていた兵士は城



—— 峪泉活水 “九眼泉” ——

門をくぐって一気にこの馬道をかけ登り、楼閣にいる將軍に伝えたのだろう」と、NHKのシルクロード取材班は記しているが、二度城壁に突き当って、そこで体勢を立て直してこの急坂を駆け登ることとは、いかに汗血馬の血をひく駿馬といえども、蹄が滑って不可能だったのではないだろうか。むしろ敵の侵入を妨げる、防禦のための急坂と考えた方が妥当なような気がする。とにかく馬道に設けられた手摺に頼らなければ、とても登って行けない程の急傾斜なのである。この坂を登り切ると、内壁の上に出る。そこは幅広い歩廊になっていて、ここにも大勢の観光客が思い思いに景色を眺めたり、

写真を撮り合ったりしていた。回廊になっているこの歩廊は、日本の城で言えば天守閣に当たる三層の楼閣に通じている。私に蜘蛛巣城と感じせしめたこの楼閣は、辺境の城塞とも思えぬ、精緻且つ優雅なたたずまいである。破風などの彫刻は、どれもこれも、まことに見事というしかない。明朝が興って五年後、このような城塞がこの地に完成したということは、元朝末期の内乱を避けて流亡していた、優れた大工や左官を集めて築城させた、馮勝という將軍の大きな功績であったと思う。つまり為政者がいかにこの関城を重要視していたかがうかがえるの

である。

外壁に二箇所、内壁の四隅に角楼が造られている。望楼と武器庫を兼ねた建物であったと思われるが、その一つに入ってみた。一步足を踏み入れた途端、強烈なアスモニア臭と、蚊柱がウワーンと身に纏わりついて来た。蚊柱を払い払いして、窓のところまで行くのになんか努力しなければならなかった。

室内には何も置かれていない。ようやく辿り着いて窓から外を窺うと、見えるのは空だけで、身長一七一センチメートルの私が背伸びしなければ、地上を望むことは出来なかった。当時の兵士の体格がずば抜けて優れていたとも思えないから、この窓は何のためにこんな高いところに造られたのか、という疑問は残るが、蚊柱とアスモニア臭に追われて、ほうほうの態で退散する。

古来、果して嘉峪関には便所の設備はあったのであろうか。現在は売店の隣に公衆便所が設けられているが、城壁に登ってしまえば、それらの施設は全く無い。尿意を催せば、角楼で処理する以外方法は無かったと言わざるを得ない。それにしても強烈な臭いである。ひょっとすると、嘉峪関築城以来の臭気が籠っているのでは……と思わずにはいらなかった。

歩廊の一画に立って、馬鬃山脈の上の、スモッグにかすんで色を失った落日に目を当てる。風が強い。北から吹く朔風である。嘉峪関が一番緊張したのはこの季節ではなかったかと、ふと思った。馬肥ゆる秋に異民族の入寇が多かったことは、「漢書」匈奴伝の「匈奴は秋に至って、馬肥え弓勁し」俟つまでもなく、いつの時代にもあったと思われるが、嘉峪関で于戈が交えられたことはあったのであろうか。

嘉峪関から酒泉までは後わずか、車で約三十分の距離である。朔風に顔を曝して、今日一日を振り返ってみた。

安敦公路でも甘新公路でも、ゴビの真只中で、黙々と鍬をふるって道路の補修をしている人を何人も見かけた。それは集団であつたり、全く独りぼっちであつたりしたが、どこからどうやってここまで来たのだらうと、実に不思議に思ったことである。おそらく労役は当番制で、朝トラックで人を集めて廻り、所定の場所にそれぞればらまき、夕方拾って帰る、そんなシステムにでもなっているのであろう。

ゴビで見たいものだと思つていたものの一つ、蜃気楼を目にすることも出来た。ただ残念だったのは、我々が見た蜃気楼はいわゆる逃水現象で、縹渺たる幻の湖が地平線にゆらゆらと揺れているだけであつた。蜃気楼らしい蜃気楼、例えば空中楼阁のようなものを見たいと思う方が間違つていたのかも知れない。

ゴビとオアシスの関わりについて、一つのパターンがあることが判つたのも、このバス旅行の収穫であつた。先ず、何故か理由は判らないが、蝶が現れると、次に我々がゴビ饅頭と呼んだ墓が見えて来る。そしてしばらく行くと、羊や馬や駱駝の群が草を食む姿が見られ、オアシスの林が余程近くなる。更に行つて、稲科の草が生い茂るようになると、オアシスの外縁に辿り着いたと考へて差し支えない。バスの音に驚いて、草の実を啄んでいた小鳥の群が一斉に飛び者ち、着ぐに草叢へ降りて行く。この草叢に隣接して、畑地がだんだん拓けて来る。いつか道の両側にポプラ、砂ナツメ、ドロ柳などの木が立ち並び、道は自ずと我々をオアシスの中心部へと誘^{いざな}つてくれるのである。そして、全く逆の経路を辿つて、我々はまたゴビへ帰って行く。

ともかくここに来るまで、私はゴビは沙漠同様不毛の地だとはかり思つていたのであるが、これはまったく間違ひだつた。意外にも草が生えているのである。駱駝だけが好んで食べるという刺だらけの草（ラクダ草）、紅柳（タマリスク）。その他庭石菖に似たうす紫色の可憐な花をつけたもの。白や黄

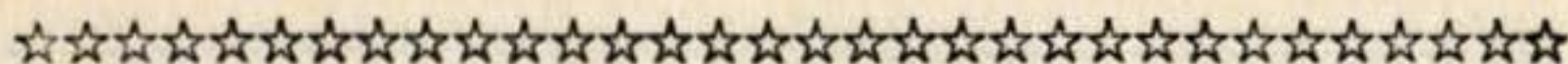
色の花をつけて、地表に張りつくように生えている草々……。草丈が短く、黄土色のゴビに紛れて目立たないが、所によってはびっしりと生えている。とは言っても、決して豊かとは言えないそんな草を、馬が、羊が、駱駝が混ざり合って一つの群となり、争うことなく仲良く分け合って食べている。彼等の強靱な生命力を感じると同時に、真の平和とはこういう姿を言うのだろうと思ったことであつた。

酒泉に近づくにつれて、次第に交通量が多くなる。バス、トラック、荷馬車、背中に荷物を振り分けにした驢馬、駱駝、それに無秩序に走る自転車の数々……。右手に河が見えて来たかと思うと、対岸に土屋の家並が広がって来る。時計を見ると、敦煌を出てから十時間が過ぎようとしていた。水の無い河を渡る。やや遠く、真正面に酒泉の象徴である三層の鼓楼が、暮色の中に聳えている。この河も確か疏勒河という名だったなと思った時、「王さん、なんていう河？」と誰かが尋ねた。「北大河です」王さんの声にはなんの屈託もなかった。北大河——いかにもいい響きである。ゴビを流れるどの河にも、疏勒河と記された地図に辟易していた私は、早速手帖にメモした。

秋さびし乾き切ったる北大河

鼓楼の少し手前を左に折れて、酒泉賓館に到着したのは、十八四十八分であつた。

(続く)



立ち止まるを善導

〈21〉

寺内大吉

挿絵・松 濤 達 文

神聖病後遺

四

道士——道教の祭司である。

では道教とは何であるか。宗教なのか、思想集団なのか。その選別が容易でない。中国の長い歴史と広域な空間は大黄河の流れが象

徴すると言われるが、道教もそれに似て複雑な思想と神異にみちた習俗儀礼とが共存しながら易姓革命に明け暮れる大地に根づいてきた。

ある分析によると道教は五つの面を持っていると言われる。

第一が古風な呪術を軸とした神異性である。



人間の能力には限界がある。だから神に祝詞を献じ呪文を唱え、神の靈力にすがって安楽な人生を取得する。

ところがここで言う「神」に特異性がある。道教の神は超人間的なゴッドやホトケではない。呪術を軸とするから未開社会に多い鬼神かと言えば、それでもない。

中国の古代史を飾った三皇五帝。歴史上に実在した聖天子群を指している。この聖天子たちは人間関係を規制する「礼」を実践するが、同時に日月星辰の運行や四時寒暖の変化までコントロールするという。呪術的な神格が賦与されている。

これに仕える道士は、当然のことながら祭司となる。

第二は医術と薬法である。

道教が求める人生目的は安楽な不老長生である。

この医術、薬法は、すでに西紀前から「脈法」とか「鍼術」(はり)を用いてきた。薬草

が持つ自然治癒力を活用した。だから道士は医者であり、また薬剤士でもあった。

第三が道義の確立である。

ただしこの道義、個人に主眼が置かれてはいない。支配する者と支配される者、つまり君民の相関関係における政治倫理の確立なのである。古代の三皇五帝の道義がすたれたあと、孔子や孟子による儒教思想の導入によって、この道德律は補強された。

第四が形而上哲学である。これもまた人文色が濃厚な老子や荘子の思想を導入したことで道教に思弁性を加味した。

だから道士は儒家であるし、同時に老荘の使徒でもある。ここらあたりが内容をいよいよ複雑化させている。

第五が文学や芸術である。豊かな感性は人生をバラ色にさせ、道教が目的とする安楽な日常を約束してくれる。

道士はこの面にも積極的に参加する。さてこうした分析に立脚すると、第四の老

る。

顔回——私は進歩しましたよ（益せり）

孔子——どういふことだね。

顔回——私は仁義を忘れました。

孔子——結構なことだ。でも未だ未だだな。

他日、顔回はまたやってきた。

顔回——私はさらに進歩しましたよ。

孔子——どういふことだね。

顔回——私は礼樂を忘れました。

孔子——結構なことだ。でも未だ未だだな。

顔回は去って、再び他日やってきた。

顔回——私は進歩しましたよ。

孔子——どういふことだね。

顔回——私は坐忘しました。

孔子——何だと！（蹴然として）坐忘とは何だ。

顔回——手足を存在を忘れ（肢体をやぶり）

目や耳の機能を封じ（聰明をしりぞけ）肉体と心を離れ（形を離れ、知を去り）自然と同化しました（大通に同ず）。これを坐忘と申します。

孔子——自然と同化できれば好悪がなくなる。変化のままに従うことができれば天衣無縫になれる。お前は立派なものだ。お願いだ。わしをお前の弟子にしてくれ。

仁義や礼樂は儒家が金科玉条とする徳である。それをすべて忘れ去り、自然に同化できた。孔子は「丘請う。なんじの後にしたがわん」と屈服した。顔回にはない。老荘にある。

「老子」は莊子ほどに具体化してものを言わない。高踏的に説いてくる。

——上徳は徳とせず、是を以て徳あり
下徳は徳を失わず、是を以て徳なし
上徳は為すことなくして、以て為すことなし

無為にして万物化し

淵静にして百姓定まる

記に曰く、一に通じて万事をつくし

無心得て鬼神服す

莊子もまた「老子」の思想に追従している。

——善く士たる者は武ならず、善く戦う者は怒らず。善く敵に勝つ者は争わず。善く人を用うる者は、これが下となる。これを争わざるの徳という。これを人の力を用うると言い、これを天下に配すと言う。古えの極なり。

外見は異端風だが、根っ子で「王道」と連結している老莊思想だ。道教は、こうした人文色の濃厚な孔子や老子の哲学を吸収しつつその原初的な神異呪術を温存し続けてきたのだった。

くり返すようだが、現実の天子がどのような

に愚かで、また悪帝だったとしても、それは彼の不徳によるものであって、「王道」の核は微塵を揺るがないのである。

この道教の「王道」思想が、日本の「神道」と、どのようにかわってきたのであるうか。かなりの部分で同潤化された色合いを発見しなければならない。

こうした多面性を持つ道教だが、ひとたび視座を外来、夷狄との対比に押し据えて考え直せば、多面のすべてがきわめて中国的である。呪法も思想もそっくり中国の産物にほかならない。

道教が宗教結社として組織されたのは後漢の末（三世紀の初め）張道陵によるものと言われる。思うに漢王朝の衰亡が切迫し、夷狄支配という危機感の増大が動機だったのではあるまいか。漢民族の伝統と思想の純潔は護持し抜かねばならない。

現実にもなく北魏王朝が出現した。鮮卑族を主体とした北夷である。その三代目太武

帝は寇謙之なる道士を重要した。

太武帝は道教の思想には殆んど関心を示さなかったが、その呪術性には魅惑されたようだ。三皇、五帝の古代聖天子の遺徳に、ではない。身体が翹が生え、鶴のように軽々と空が舞える、とささやく道士の声に耳を傾けたのである。

時の宰相崖浩は純血な漢民族、それも造詣の深い儒者だった。この崖浩がすこぶる積極的に道士寇謙之を支援したのは夷狄の太武帝ではあっても伝統の「王道」と願ったからであろう。そして北魏王朝の矛先は仏教へ向けられた。

廃仏が断行されたのである。

この北魏王朝に限らず、中国の「中世」にあつて、どこの宮廷にも道士の影が色濃く玉座周辺を染めていた。

五胡六朝と呼ばれたこの小国分立期。夷狄の王は漢化されるべく道士によって洗脳され、やがて「熟蕃」などという栄称で呼ばれ

た。漢民族出身の小国王たちは道士の進言によっていつも統一国家を夢見た。

中原に覇をとえ「封禪の儀」を執行するのだ。

現山東省の泰山山脈、その首峰たる泰山頂上へのぼる。「封禪」の封は天神、禪は地神である。天地の神に聖天子となることを誓うのである。三皇、五帝へ一歩近づくであろう。

こうした道教の主導下にあつて、仏教徒はどのように対応したのであるか。道士たちがつねに問いかけてくる言葉はきまっていた。

——王か。仏か。

——王と仏とはどちらが上位なのか。

この場合、仏がインドに実在した釈迦という人間で象徴化されているだけに道教の追究はきびしかった。

対応はさまざまであつた。「忠義こそ菩提への道」と割り切つて、積極的に王者へ臣礼

をとる僧たちもいた。また江南廬山の慧遠のように「沙門は王者を敬せず」と王法と仏法とを厳格に分離する修法者もいた。慧遠に面謁すべく廬山へ登ってきた天子恒王と会おうともしなかった。

唐王朝、その内部にあって道教の道士たちは侮り難い地歩を占めていた。そもそも唐王太宗は道教の地穀上で生い立っている。

太宗の生地、現山西省の太原府には「晋祠」という古洞がある。ここには周の成王の弟で山西の太守に封ぜられた唐叔虞が祀っている。英邁な資質に恵まれながら叔虞は終生、この僻地を守りぬいて果てた。山西の国名「唐」を冠して唐王と呼ばれた。こんこんと清泉が尽きることなく湧き出る晋祠の池畔に遺骸を葬った。

若き太宗（李世民）は隋の唐鎮守將軍だった父の李淵（高祖）とこの池畔で誓い合った。

——主上は無道、百姓は困窮。晋陽城外はすべて戦場。民心にしたがい、義兵をおこ

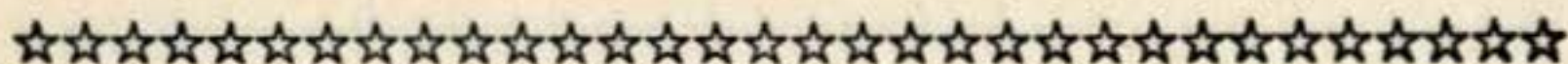
し、禍を転じて福となす。まさにこれ天授のとき。

挙兵が晋祠の誓いから決行されたのである。長安をおとし入れ、隋の煬帝の本拠に激しく揺さぶりをかけた。その煬帝は江南の地にいたが、臣下に殺され、やがて李淵父子は統一国家を実現させる。あえて国名を「唐」としたのも晋祠の泉下で眠る唐叔虞の志を継承したからである。

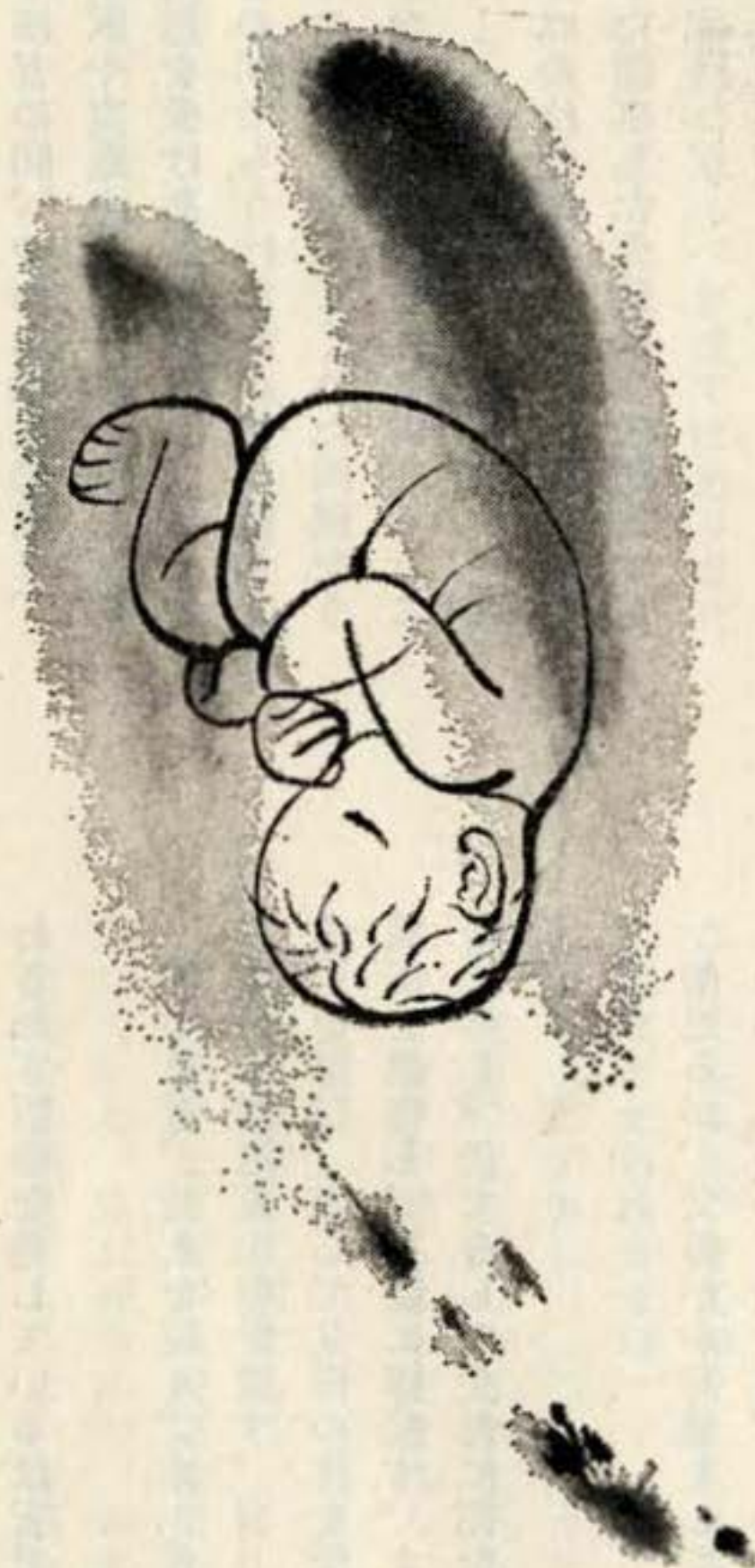
ちなみにその唐叔虞が終生天下を望もうとしなかったのは、転封にあたり成王から「唐の地に骨を埋めよ」と言われたからである。

「天子の言葉に戯れなし」と叔虞は如何なる事態にも、如何なる誘いを受けても、この地を離れようとはしなかった。ここにも「王道」のきびしさがうかがわれ、唐王朝の精神の支柱にそれが貫通している事実が歴然としている。

太宗の正室、文德皇后が篤く道綽に帰依した念仏願生者だったことは前にも触れたこと



出 産



——母は懐胎し終って十カ月がすぎるまで行住坐臥いつも苦しみを経験する。また出産時には死の難にも遇いかねない。また生まれたあとは三年ほどの間、つねに「尿に眠り、尿に臥し」寢床や衣服は汚れ放しである。こんな大恩を受けながら成人して、女を愛し、彼女との間でもうけたわが児に親しんで、かんじんの自分を生んでくれた両親をうとんじ、恩孝を怠るなどは畜生と異なるところがない。

「俗王を拝さぬのはわかりますが、長上の不敬を両親、また師事した先輩にまで適用するのは間違いです」

善導の言葉を道宣は舌気も鋭くさえぎった。

「ところがだ。父母や師の恩を強調しつつその倫常を天子との関係にまで押し上げてゆくのが王者の手口なのだ。だから先ずその根っ子を断絶してしまわねばならない」

父母への恩愛の感情を権力者に利用される

というのである。

たしかに当時の仏教者の間で道宣と似た考えを持つ僧は多かった。唐太宗は貞観二年、わざわざ詔勅を発しているほどである。

——仏道、教えを説く。本（来）善事を行う。あに僧尼道士等を遣す。妄りに自ら宗（派）を尊び、坐して父母の拝を受けること、風俗を損害し、礼経に悖乱す。よろしく即禁断すべし。仍て令して父母に拝を致さしむべし。

僧尼らが、父母がお辞儀をしているのに、どっかりと坐って受ける、という風儀が横行していた事実を物語る。

この勅令では、王への致拝は全く触れていない。父母だけである。にもかかわらず二年後、父母致拝の勅令も撤廃された。道宣が四度も建白書を提示したということは、王者父母への致拝がたびたび唐宮廷内で稟議された

からであろう。

「道宣和上、その考え方ですが」

善導は控え目に切りだした。

「その考え方とは……」

「父母の恩が君恩に利用されるかもしれない、というその考え方です」

「それがどうかしたか」

「政事です。沙門の取るべき道ではありませんね。沙門は、父母の恩それだけを純粹に考えたらよろしいのではないしょうか。仏教はあくまでも人と人との関係で問題をとらえねばなりませんね」

「うむ……」

「釈尊にしてもビンバシャラ王と深く接触なさっています。しかし王という権力者だからではありません。仏法を信じ敬した人間だったからです。そのビンバシャラ王を苦しめ、自絶へ追いやった悪太子アジャセ。涅槃經によれば、釈尊はこのアジャセ太子とも接触します。それこそアジャセが救われなければ、

自分も涅槃へはいらない、とさえおっしゃっています。これ以上に深いかわり方はないでしょう」

「たしかにそのとおりだ」

「宗教を政事とかかわらせてしまうのは、道教流のやり方です。道宣和上、道教や道士を憎むあまり、仏の道をゆがめるのは間違ったことでしょう。道宣和上ともあろうお人が、私には考えられませぬ」

「いや、恥ずかしいことだった。多くの先人、先哲の道を探ぐって来ながら、かんじんのことを年甲斐もなく置き去りにしてしまっただ」

道宣は謙虚に反省する。

その謙虚な反省が「続高僧伝」に善導を採用している。未だ在世中で、宗教者としての大成像を見届けてもいない善導を、である。よほど心服したにちがいない。

道宣は「続高僧伝」の善導篇で書く。

善導に西方浄土の實在を問うた人が「念仏

をとなえれば必ず浄土へ往生できる」と答えをもらうと、光明寺の門を出て柳樹にのぼり「合掌して西を望み、倒して身を投げ、地に下りて遂に死」んだ、というあの事件である。

そして、道宣はこんな一句で伝を締めくく

——事、台省に聞こゆ

この柳樹投身事件を書いたのは道宣の「続高僧伝」だけである。「新修往生伝」にもあるが、これは道宣をなぞっただけである。

道宣が捏造したと言うのではない。また善導へ悪意をこめて書いたなど絶対にあり得ない。

そうではないのである。鍵は締めくくりの語句だ。「事、台省に聞こゆ」である。

道宣は善導の教化力を賞揚するつもりだったにちがいない。道宣の感覚には、やはり宗

教上の成果が「台省に聞こゆ」という形でしか把らえられなかったのであろう。道宣の主体はあくまでも政事だった。柳樹事件こそ、善導の価値を高める行蹟と信じたにちがいない。あるいは、実際には善導とはかわりがないところ

で発生した事件だったかもしれない。

龍朔二年（六六二）と言えば道宣が死ぬ五年前だ。すでに高宗の治世となっている。道宣は唐王朝の要路へ「論沙門不応拝俗啓」を送りつけた。僧は俗啓（王）を拝さない、という論証だ。それを、高宗の母荣国夫人。高宗の第六子牧沛王、そして宰相全員に送ったのである。

唐王朝も黙視できず、五月十五日に中台都堂に州県の長官ら千余人を集めた。僧の側からも西明寺道宣、大莊嚴寺威秀、大慈恩寺靈会、弘福寺会隠ら三百余人が登庁してきたのである。

（つづく）

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 五十二巻 三月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十一年二月二十五日 印刷
昭和六十一年三月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒二〇三 振替東京八―八二一八七番

第五十二卷 三月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年二月二十五日印刷 昭和六十一年三月一日発行